

県外派遣報告書

審判員名	眞榮喜 工	所属	クラブ連盟
大会名	第31回 関東クラブバスケットボール選手権大会 兼 第44回 全日本クラブバスケットボール選手権大会 関東地区予選会		
期間	平成30年2月3日(土)・4日(日)		
会場	池の川さくらアリーナ(茨城県日立市)		
スケジュール			
期 日	内 容	場 所	
2月2日(金)	審判会議	多賀市民会館会議室202・203号室	
2月3日(土)	1・2回戦	池の川さくらアリーナ	
2月4日(日)	準決勝・決勝	池の川さくらアリーナ	
会議 講義 内容			
<p>「Guide Lineについて」 北島寛臣氏(指名・埼玉)</p> <p>バスケットボールの成り立ちとして、「ケガをさせない」ということが大前提にある。今日のFIBA、JBAで掲げられている「Clean the game」を体現するために、いつ、どこで、誰が吹いても同じように判定できるようにするためにガイド・ラインはある。試合の早い時間で基準を示す(テンポ・セッティング)ことが大切。序盤にコールせずに試合が進むと、終盤でコールすることは難しくなってしまうため、一つひとつのプレイに対しての判定の積み重ねが重要である。FOMIについて、オフェンス・ディフェンス共に権利があり、それを不当に妨げるものに関しては等しく取り上げられるべき。アンスポーツマンライク・ファウルを宣するにあたってのクライテリア(基準)を明確に判定すること。それは他のファウルを宣するにあたっても同じ。ただ何となくではなく、何が何故イリーガルなのか判定の根拠をもっておくことが大切。全ての判定に(コールもノー・コールも)説明責任がある。皆が同じ方向性をもって、試合をクリーンに進めていけるようにクルーで協力していきましょう。</p>			
<p>「2Person Mechanicsについて」 小澤勤氏(指名・山梨)</p> <p>JBAとして今後3POをメインに展開していく方向性ではあるが、実質地元の大会やブロック大会は2POが主体となっている。2POと3POの一番の違いは「2人しかいない」ということ。2POのトレイルは3POのトレイルとセンター2つの役割を担わなければならないし、リードは時に走って戻らなければならないこともある。一人が一つのマッチアップだけ見ればよいのではなく2つ3つそれぞれが管理しなければならない。パートナーが何を見ていて、どれは見ることが出来ない、だから自分は何を見なければならないのか、自分にしか見えないものは何かを感じる事が大切。全てにおいて小さなことの確認作業の積み重ねが大切である。例えばスロー・インの際に①スローインの位置。②スローワールのディフェンス位置。③ショット・クロックの確認。④T.O.とチーム・ベンチの掌握。⑤スロー・イン前の不当な触れ合い。等々を丁寧に確認することを習慣化することで試合の再開を円滑にすることが出来る。確認作業、情報共有のツールとして「声を使う」ことが現在強く推奨されている。誰がファウルをしただけでなく、誰がファウルをされたのか、AOSなのか否か、チームファウルが何回目なのか、タイム・アウトがそれぞれいくつなのか、再開時のショット・クロック残数、再開場所等々挙げればキリがない程、確認事項は多くある。これらを声に出すことでクルーやチームへの共有、自身の再認識に繋がり、誤った処置を未然に防いで試合をリードしていくことが出来る。試合前のプレ・ゲーム・カンファレンスから、クルーとの確認作業を積み重ね、良い試合運営をしていきましょう。</p>			
<p>ブロック長挨拶 渡邊整 関東ブロック審判長</p> <p>今年度のブロック大会ではガイド・ラインについて伝え続けてきた。どこで、だれが、どの試合を担当しても同じ基準で、皆が同じ方向性をもって進めるようにしていきたい。そこでプレ・ゲーム・カンファレンスでの確認や試合中の情報共有を大切にしていきたい。今後上級の審査会は全て3POとなる。しかし現状2POでの運営が大半であることから、両方しっかりと行う必要がある。2POでは3POとは違った動きや感性が求められる。広くアンテナを張って多くの情報を取り入れてほしい。我々は皆、数々の失敗をしながら今がある。失敗を恐れずにトライし、同じ過ちを繰り返さなければ良い。最後の関東クラブ選手権大会、我々の一つひとつの判定が、正しく強い男子5チーム、女子6チームが関東代表として導き、全日本クラブバスケットボール選手権大会へ進むことを願う。</p>			

実技				
担当試合	期 日	平成30年2月3日(土)	男子	1回戦
	対戦カード	CBアルポラーダ(茨城1位)	VS	ALSOK GUNMA(群馬2位)
	相手審判	中嶋 清貴 氏(山梨県)		
ミーティング内容		主任 白川 義一 氏(東京都)		
<p>1ピリ細かく刻んでいく中で、一方のチームばかりコールされる時間帯があった。Same play,same judgeで公平性を伝えられるとよかった。吹き急がずに、影響を見て「絵が出来上がって」からコールするという習慣づけ、ジャストで鳴らすことが全てではない。オフィシャル・ワーニングの示し方について工夫が必要だった。</p>				
担当試合	期 日	平成30年2月4日(日)	男子	準決勝
	対戦カード	弥生クラブ(東京1位)	VS	CBアルポラーダ(茨城1位)
	相手審判	CC:平出 剛 氏(栃木県)	U1:菊地 真吾 氏(群馬県)	U2
ミーティング内容		主任 小澤 朋克 氏(群馬県)		
<p>グループ・ミーティングが行われ、「プライマリー・エリアとプライマリー・アングル」や「クロック・コントロール」、「FAKEに対するオフィシャル・ワーニング」等についてディスカッションを行った。中山氏(茨城県)が進行役となり受講生からの質問を引き出し、CCの平出氏のリードによってクルー間認識やオーディエンスの感覚を聞き出し、一方通行ではない有意義な討議が出来た。また、主任の小澤氏よりコート・サイドから見ていて、クルー3人が如何に細かな約束事のもと、自然に難しいことを実行されているかを感じられたとの講評を頂いた。</p> <p>個人としては、クロック・コントロールの細やかさを試合中にも平出氏より学んだこと、ワーニングのタイミングを逸してしまったこと、もっと絵が出来上がってからコールするという点が反省であった。</p>				
全体の感想				
<p>関東クラブ選手権としては最後となる大会に参加できたことを嬉しく思います。関東各都県の皆様、特に開催地茨城県の方々には大変お世話になりました。正しく強いチームが関東代表として全日本選手権に参加できるようにと運営され、その中で埼玉県勢が男女とも決勝まで残ったことは誇りに思います。しかし、初日に関しては、残念ながら県内で吹かれていないものを関東では丁寧にコールされることにチームが戸惑っている場面があったのも事実です。それにアジャストしたチームを称えつつも、日頃から県内クラブ(社会人)でも同じ基準でチームに方向性を示していけるようにならなければならないと痛感しました。</p> <p>2日目、男子準決勝においてPGCからゲーム中、試合後のミーティングにおいても平出氏のコミュニケーション能力、クルーの意見を引き出す力というものに強く魅力を感じました。コート内外にこだわりを持って、誰一人としてひとりぼっちにはせずに、皆でステップアップしていけるよう、自身の力をつけていきたい。</p> <p>この度、茨城県協会の皆様には細部にわたるまで御配慮頂き本当にお世話になりました。また、今大会へ派遣して下さい下さった埼玉県協会、日頃活動を共にしている県内審判員の皆様へ、この場をお借りして御礼申し上げます。</p>				